

# 日本周辺国際魚類資源調査委託事業

津本欣吾・久野正博・井上勇人・柴原浅行・谷水宗美・井上祐希・久保典敬・西川 俊

## 目 的

太平洋を広く回遊するカツオ・マグロ類について、資源量評価やその資源動向の予測、我が国周辺への来遊量の予測等を行うために必要な科学的情報を収集、整理することを目的に、国立研究開発法人水産研究・教育機構国際水産資源研究所や各県水産試験場と連携して調査を行った。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集を行った。

## 方 法

### 1. 沿岸域における漁獲実態調査

県内におけるカツオ・マグロ類(クロマグロ, キハダ, メバチ, ビンナガ)の主要水揚港である和具, 浜島, 宿田曾, 紀伊長島, 尾鷲, 奈屋浦の各港において、漁業種類別の水揚状況を調査した。また、前年度に引き続き、クロマグロ加入状況の早期把握を目的とした曳縄標本船調査(GPS ロガーを用いた漁獲実態調査)を実施した。

### 2. 沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査

沖合、遠洋漁場における中型、大型竿釣船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会および近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY 情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数および漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況との関連等について検討を行った。

## 結果および考察

収集した QRY 情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣漁場の変遷を「平成 30 年における三重県中型・大型竿釣船のカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲動向を国際水産資源研究所に提供した。これらのデータは、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価およびそれに基づく資源管理方策を検討する国際会議において活用されたほか、日本周辺海域への来遊量予測の科学的根拠としても利用された。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細については、関連報文で報告されることから、ここでは本県所属船の 2018 年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況概

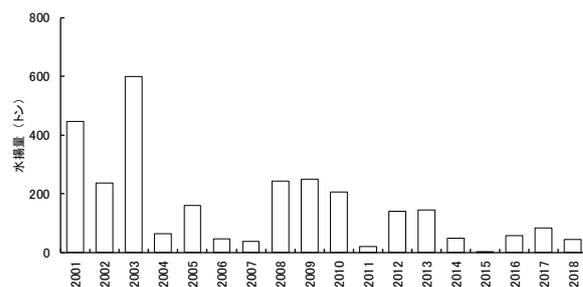
要をとりまとめた。

## 1. カツオ漁況

### (1) 沿岸曳縄船

2018 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の曳縄船によるカツオ水揚量は 42.9 トンで、前年(83.1 トン)の 52%、過去 10 年平均値(119.5 トン)の 36%となった(図 1)。5 月下旬に伊豆諸島北部で切離した黒潮の一部が小暖水渦となり、遠州灘を西進、6 月上旬から下旬にかけて熊野灘に停滞、南下したことから熊野灘海域に広く漁場が形成され、一時的に好漁となった。しかし、他の月では概ね過去 10 年平均値を下回った。主要 4 港の水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均 CPUE は 42kg/隻と前年(58 kg/隻)を下回った。

水揚げが多かった 6 月の魚体は銘柄中小(1.5~2 kg)、



中(2~3 kg)が主体であった。

図 1. 沿岸曳縄船によるカツオ水揚量(主要 4 港)

### (2) 小型竿釣船(19 トン以下)

2018 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の小型竿釣船によるカツオ水揚量は 616.1 トンで、前年(622.4 トン)の 99%、過去 10 年平均値(416.8 トン)の 148%と、近年では比較的多く県内市場に水揚げされた(図 2)。三重県所属の小型竿釣船は、4~5 月伊豆諸島北部周辺(銭洲, 神津島, 三宅島)を主体に操業し、主に御前崎に水揚げし、一部は県内市場にも水揚げされた。6 月に入ると熊野灘沿岸で漁場が形成され、県内市場に多く水揚げされた。

県内市場の水揚げデータによれば、4~7 月は、銘柄中(2~3 kg)、中小(1.5~2kg)主体に大(2.5~4 kg)、小(1~1.5 kg)が混じり、8 月は中、9 月は特大(4 kg 以上)、大、10 月は特大~小が主体となった。

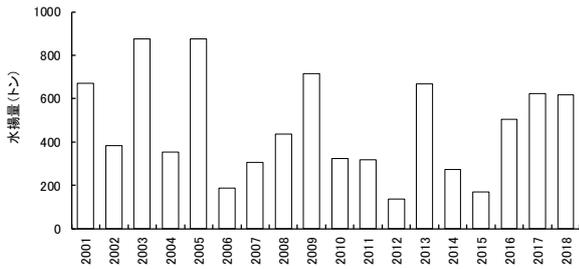


図 2. 小型竿釣船によるカツオ水揚量 (主要 4 港)

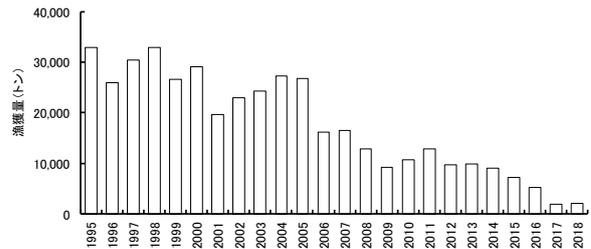


図 4. 三重県大型竿釣船によるカツオ水揚量

## (2) 中型竿釣船

QRY 情報 (無線漁況連絡聴取簿) に基づく 2018 年の三重県中型竿釣船によるカツオ漁獲量は 5,746 トンで、過去最低の漁獲となった前年 (4,950 トン) は上回ったものの、過去 10 年平均値 (6,876 トン) の 84%にとどまる低調な漁獲量となった (図 3)。

3 月までは 25° N 以南の中南海域主体の操業で、4 月に入り漁場は北上し、伊豆諸島周辺を主体に操業した。5 月は伊豆諸島沿い (30~34° N, 140° E) 及び房総半島東方 (33~36° N, 141~147° E) で操業したが、5 月中旬以降、伊豆諸島~房総半島東方 (33~36° N, 140~147° E) で広くビンナガの漁場が形成され、ビンナガ主体の操業となった。7 月に入ると東北沖でカツオ主体の操業となり、7 月は沿岸域 (36~40° N, 142~147° E) で漁がまとまり、1 か月で 1,671 トンの漁獲となった。8 月以降も漁場は比較的沿岸域に形成されたが漁獲は低調で、10 月に入ると CPUE は急減し、11 月初旬に全船操業を打ち切った。

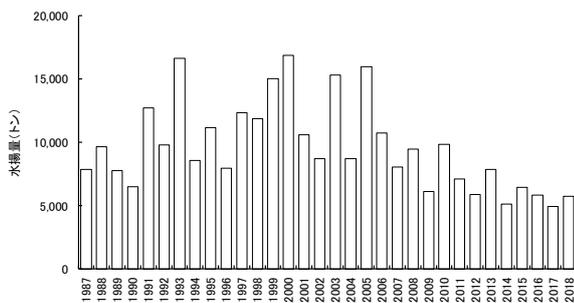


図 3. 三重県中型竿釣船によるカツオ水揚量

## (3) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2018 年の三重県大型竿釣船によるカツオ漁獲量は 2,029 トンで、過去最低の漁獲量となった前年 (1,991 トン) と同程度、過去 10 年平均値 (8,847 トン) の 23%と、極めて低水準となった (図 4)。前年からの漁獲量の大幅な減少は、着業船の減少 (2016 年: 5 隻, 2017 年: 2 隻) に起因するところが多い。

## 2. ビンナガ漁況

### (1) 中型竿釣船

QRY 情報に基づく 2018 年の三重県中型竿釣船によるビンナガ漁獲量は 2,853 トンで、前年 (2,765 トン) とほぼ同程度、過去 10 年平均値 (3,159 トン) の 90%と、近年では中程度の漁況となった (図 5)。

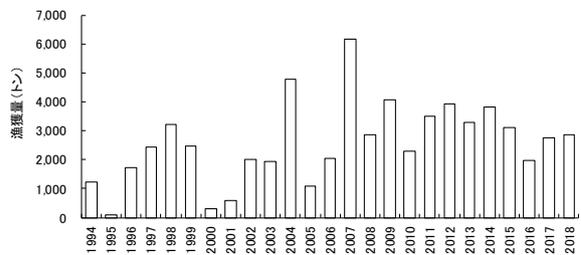


図 5. 三重県中型竿釣船によるビンナガ水揚量

### (2) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2018 年の三重県大型竿釣船によるビンナガ漁獲量は 309 トンで、過去最低の漁獲量となった前年 (324 トン) をさらに下回り、過去 10 年平均値 (3,160 トン) の 10%の低調な漁況となった (図 6)。漁獲量の大幅な減少はカツオ同様、着業船の減少によるところが多い。

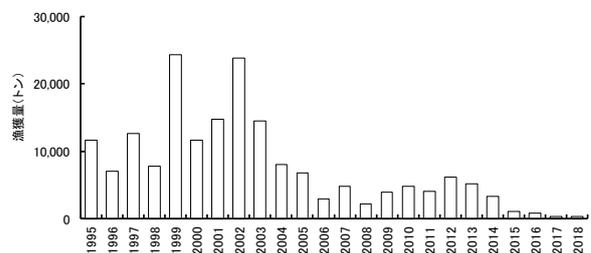


図 6. 三重県大型竿釣船によるビンナガ水揚量

## 3. クロマグロ漁況

### (1) 漁業種別水揚げ状況

三重県主要 6 港における 2018 年のクロマグロ水揚量 (全漁業種) は 0.6 トンで、前年 (4 トン)、過去 10 年平均値 (25 トン) を大きく下回り、1995 年以降最低の水揚量となった。水揚げ規制により 30 kg 以下の個体の水揚げ

はほとんどなく、30 kgを超える個体が定置網でわずかに水揚げされたのみであった。

## (2) クロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）の採捕状況

熊野灘沿岸域における 2018 年の養殖種苗用ヨコワ漁（曳縄）は、前年より 4 日早い 7 月 16 日から始まり、8 月中旬には県内養殖業者の池入れ予定数を満たし、終漁した。標本漁協所属船による採捕尾数と有漁隻数から求めた CPUE は 8.6 尾/隻で、前年（9.4 尾/隻）、前々年（11.9 尾/隻）を下回ったが、極めて低調であった 2012～2015 年と比較すると高い水準であった（図 7）。

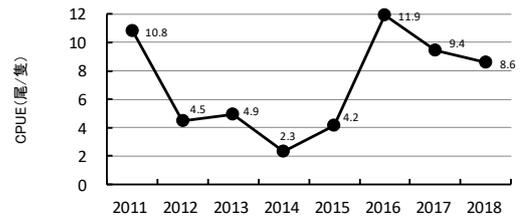


図 7. 標本漁協所属船によるクロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）CPUE の経年変化

## 関連報文

平成 30 年度国際漁業資源調査・情報提供委託事業報告書，国立研究開発法人水産研究・教育機構。  
平成 30 年における三重県中型・大型竿釣り船のカツオ・ビンナガ漁況総括，三重県水産研究所。